ひろげようこころのネットワーク

1
January 2020（令和2年）

兵庫県・（公財）兵庫県人権啓発協会
兵庫県マスコット はばタン

ひょうご人権ジャーナル

きずな KIZUNA

INDEX

2 共に支え合う すこやか兵庫をめざして
井戸 敏三（兵庫県知事）
3 グラフで見る特に関心がある人権問題
4 阪神・淡路大震災から25年を迎えるにあたって
室崎 益輝さん（兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科長）
5 被災地での復興支援の取組
震災・学校支援チーム（EARTH）
（兵庫県教育委員会事務局教育企画課）
6 3・11から9年の時間を経た今
開沼 博さん（立命館大学衣笠総合研究機構 准教授）
7 ふれあいサロン
8 情報ぷらざ

特集 地域の安全・安心

忘れない、そして伝え活かす

Photo 香美町 鉢伏山

巻頭言

共に支え合う すこやか兵庫をめざして

兵庫県知事
公益財団法人 兵庫県人権啓発協会 会長
井戸敏三

6千人を超える尊い命を奪い、ふるさと兵庫に大きな傷跡を残した阪神・淡路大震災。この1月17日であれから25年を迎えます。

私たちは、内外からの温かい支援や励ましを力にし、ともに助け合い、支え合いながら、県民一丸となって今日まで創造的復興の道のりを歩んできました。また、その間も、ひとたび災害が起きれば被災地へ駆けつけ、震災の経験と教訓をもとに県民の皆様とともに被災地支援に取り組んできました。

しかし今、兵庫の被災地でも半数をこえる県民が震災を経験していないと言われ、震災の風化が懸念されています。近年、列島各地で自然災害が多発し、また、近い将来、南海トラフ地震の発生も危惧されるなか、自然災害への備えが急務です。

忘れないだけでなく、知らない人々に伝える。経験や教訓を活かす。そして、次なる災害に備える。25年の節目に原点に立ち返り、「忘れない」「伝える」「活かす」「備える」取り組みを県民の参画と協働のもと進め、安全安心な社会の実現に取り組んでいきます。

また、創造的復興の歩みの中で学び、培ってきた「共生の心」をこれからの兵庫づくりに活かすことも大切です。めまぐるしい社会環境の変化を背景に、人権課題は複雑多様化しています。児童虐待や学校でのいじめ、職場でのハラスメント事案は後を絶たず、インターネットを通じた人権侵害もますます深刻化しています。人権とは、人と人が互いの違いを認めて、誰もが幸せに生きていくための大切な権利です。人権課題に丁寧に対処し、令和の時代にふさわしいこころ豊かな社会を築かねばなりません。

本県の「ユニバーサル社会づくりの推進に関する条例」と「障害者等による情報の取得及び利用並びに意思疎通の手段の確保に関する条例」は、互いの人権を尊重することで、誰もが同じ地域社会で生活し、社会のあらゆる活動に参加することのできる社会の構築をめざすものです。この条例のもと、兵庫に息づく共生の心で、人権尊重を自然に態度や行動として表すことができる、人権文化が定着した社会づくりを進めます。

今年は東京2020オリンピック・パラリンピックの年です。多様性を認め合い、年齢や性別、障害の有無、言葉、文化などを越えて、人と人とがわかり合える絶好の機会ではないでしょうか。

みんなの力を合わせて、生活、産業、人、地域、そのどれもが多様性と可能性にあふれ、健全で元気な「すこやか兵庫」を創っていきましょう。

本年もどうぞよろしくお願いします。

特集 地域の安全・安心

阪神・淡路大震災から25年目の節目を迎え、私たちは震災から得た経験と教訓を風化させず、地域や世代を超えて伝え、活かし、備える取り組みを進めていく必要があります。

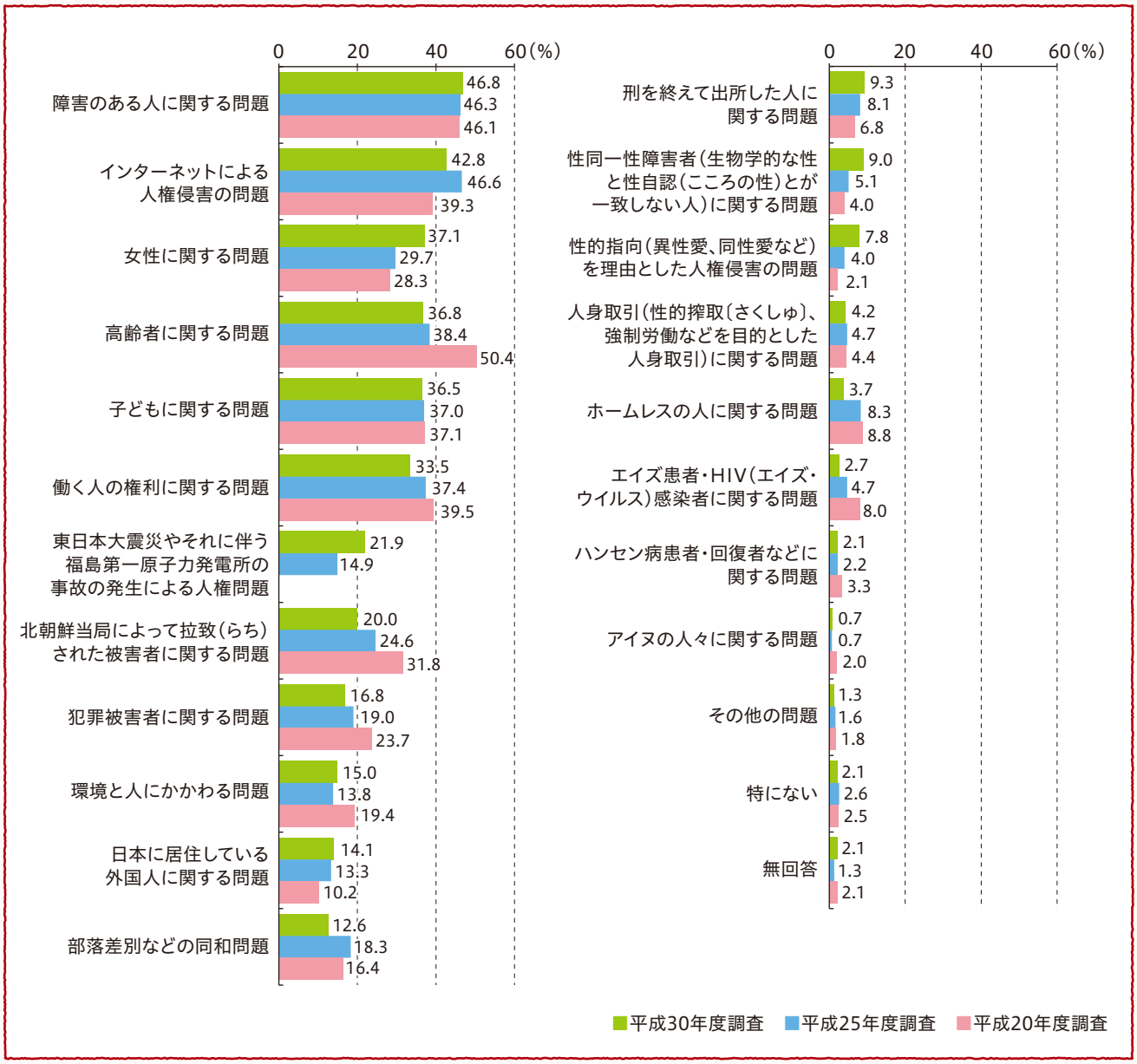
本号では、生命の尊厳や人と人の絆、地域の支え合いの大切さを確かめ、誰もが安全で安心して共に生きる社会づくりについて考えてみましょう。

グラフで見る特に関心のある人権問題

平成30年度 人権に関する県民意識調査の結果より

日本の社会には、人権にかかわるいろいろな問題がありますが、あなたが特に関心をお持ちのものをあげてください。

（○は5つまで）



兵庫県が昨年度実施した人権に関する県民意識調査の結果を見ると、県民の皆さんが特に関心のある人権問題は、「障害のある人に関する問題」が46.8%で最も高く、「インターネットによる人権侵害の問題」(42.8%)までが40%台となっています。以下、「女性に関する問題」(37.1%)、「高齢者に関する問題」(36.8%)、「子どもに関する問題」(36.5%)「働く人の権利に関する問題」(33.5%)が30%台、「東日本大震災やそれに伴う福島第一原子力発電所の事故の発生による人権問題」(21.9%)、「北朝鮮当局によって拉致（らち）された被害者に関する問題」(20.0%)が2割で続いています。

私が思うこと

阪神・淡路大震災から25年を迎えるにあたって

兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科長 室崎益輝（むろさきよしてる）さん

Profile

1944（昭和19）年生まれ。京都大学大学院建築学修了。神戸大学教授、消防研究所理事長、関西学院大学教授などを経て、現職。日本火災学会会長、日本災害復興学会会長、地区防災計画学会長などを歴任。著書に「地域計画と防火」（勁草書房）、「建築防災・安全」（鹿島出版会）など。建築学会論文賞、神戸新聞平和賞、NHK放送文化賞などを受賞。

今、求められるもの

災害は、その時代その社会の矛盾や歪みを顕在化します。被災の原因として、その歪みがあげられますし、復興の目標として、その歪みの克服があげられます。

阪神・淡路大震災は、戦後50年の節目に発生しており、大都市を直撃した戦後初めての地震災害でした。それだけに、戦後の成長や開発が「これで良かったか」を、甚大な被害によって厳しく問いかけるものでした。

大都市一極集中の国土開発、環境共生を忘れた自然破壊、高齢化社会での福祉の遅れ、ガバナンスでの市民参加の弱さなど、多くのことが震災で問われました。それゆえに、自律分散型社会の形成、自然と人間との環境共生、福祉コミュニティの形成、新しい市民社会の実現などが、震災後に目標として掲げられました。こうした目標が「どこまで達成されたか」を問い直すことが、震災25年の今、改めて求められています。

復興の成果と課題

確かに、復興の中で改善された部分も少なくありません。復興における被災者主体のまちづくり、行政の審議会などにおける男女共同参画の進展、住宅再建に対する公的助成の制度化など、不十分ながらも震災以前の社会的欠陥に大きな風穴を開けています。それまでの都市復興やインフラ復興に代わって、「人間復興」や「生活復興」という考え方も定着しました。

その一方で、最近の災害での避難所の状況を見ても、被災者の人権が守られない劣悪な環境は、25年前と何ら変わっていません。住宅再建助成が制度化されたといっても、生活再建の全体像を見ると、25年前よりも悪くなっています。「震災関連死」の増大は、そのことを如実に示しています。そうした人権に関わる問題もさることながら、地球温暖化など環境共生に係る問題も全く改善されていません。

教訓を生かして

苦しんでいる人を救済するという短期的課題と、社会を理想的なものにするという長期的課題は、資源と時間の制約もあって容易に両立できないものです。大震災の直後には、短期的課題を優先するあまりに長期的課題を疎かにしてしまったのではないでしょうか。そのやり残した長期的課題に、勇気をもって挑戦することが、求められています。その意味では、復興はいまだ道半ばです。初心にかえって、再挑戦を試みたいです。

被災地での復興支援の取組

兵庫県教育委員会事務局教育企画課

震災・学校支援チーム（EARTH）

震災・学校支援チーム（EARTH）とは

震災・学校支援チームEARTH（Emergency And Rescue Team by school staff in Hyogo）は、1995（平成7）年の阪神・淡路大震災の際に全国からいただいた支援に報いるため、災害時に被災地の学校を支援する教職員による組織として2000（平成12）年に発足しました。平時は所属校や地域で「兵庫の防災教育」の推進に取り組み、災害発生時には被災地の学校の避難所運営、学校の再開、児童生徒等の心のケア等の支援を行います。今年度は220名の教職員が活動しています。

被災地支援の実際

EARTHは、2000（平成12）年の北海道有珠山噴火における支援を皮切りに、東日本大震災や熊本地震といった大規模災害の被災地支援、さらにはインドネシアや中国等、国外の支援にも取り組んできました。

昨年度は、大阪・岡山・北海道で延べ147名が被災地支援を行いました。具体的には、大阪北部地震では、児童生徒や保護者、教職員の心のケアに関する支援を行いました。登校指導や教育相談、給食指導支援を通して児童生徒の様子を観察し、担任と情報交換をするとともに、職員会議等で心のケアの視点から支援の方向性を示しました。また、西日本豪雨の際には、倉敷市真備地区で避難所となっている学校の教職員が学校再開に向けた業務に専念できるよう支援するとともに、学習ルームにおける児童の支援も行いました。加えて、管理職との学校再開に向けたロードマップ作成や家庭訪問への同行、心のケア研修等を実施しました。さらに、北海道胆振東部地震では、養護教諭やスクールカウンセラーと児童生徒の状況を共有しながら、数年後を見通した支援の在り方等について助言を行いました。

阪神・淡路大震災の教訓を生かして

阪神・淡路大震災時、公的な支援が届かない中で避難所となった学校の教職員が対応に追われ、子どもたちの日常を取り戻すのに長期間を要しました。また、数年が経過しても心のケアを必要とする子どもたちも多数いました。そういった困難な状況に直面する中で得た知見や教訓をEARTHは被災地で伝え、広めています。

まもなく阪神・淡路大震災から25年が経過し、EARTHも発足から20年を迎えます。震災を経験していない教職員が増加する中、近い将来に発生が予想される巨大地震や多発する自然災害への備えが求められています。

震災から教育復興を成し遂げてきた兵庫県のEARTHが行ってきた被災地支援をきっかけに、熊本県でも学校支援チームが発足したほか、他府県でも同様の組織の養成が行われ始めました。各都道府県と連携を図りながら、今後さらにEARTHの活動を発展させるよう取り組んでいきます。

避難所運営支援

児童向けの心のケア授業

のじぎく文芸賞の入賞者が決定

令和元年度のじぎく文芸賞には、1714点（一般の部196点、学齢児童生徒の部1518点）の応募がありました。審査の結果、左記の通り入賞者が決定しました。12月4日（水）の「人権のつどい」で表彰式を行いました。

作品の一部を本誌で紹介するほか、最優秀・優秀作品は当協会のホームページにも掲載します。

賞名	部門	部	作者名（敬称略）	作品名
最優秀賞	小説	一般	阿部　忠彦	ハリネズミと老人
	随想	一般	髙嶋　冴生	挑戦と進歩
	詩	一般	松末　哲也	健ちゃんとぼく
	創作童話	一般	パク　ヘレナ	バレンタインとビッグイシュー
優秀賞	小説	一般	山畑　由美	ユリとラベンダー
		学齢	兼村　琴菜	大切な友だち
	随想	一般	A　・　Y	他人ごとではない
		学齢	北尾　大珠	「普通」とは
	詩	一般	児玉　千佳	母であることは忘れない
		学齢	阪口　貴恵	言葉のちから
	創作童話	一般	田中　肇	自販機トムと仲間達
		学齢	該当作品なし	

＊学齢＝学齢児童生徒（中学生以下）

きずな TOPIC
東日本大震災に起因する人権問題

3・11から9年の時間を経た今

立命館大学衣笠総合研究機構 准教授
開沼（かいぬま） 博（ひろし）さん

風評被害の現実

「インターネットで福島のことを見ると、あの時福島にいたら子どもを産めないと書いてあった。本当ですか？」という女子高生。

「東京の物産展で採れたての作物を売っていたらわざわざ目の前で『福島の食べ物なんかいらない』と言われた」という農家。

3・11から9年の月日が経とうとする中でもまだそんなエピソードを聞く。

「そんな人もいるんです」と話すと、「そんなの前に比べれば良くなってきたんだろ」「みんながみんな、そんなわけじゃないはずだ。相手にしなければ良い」「そういうデマを言う人だって良かれと思って言ってるんだ」と返してくる人もいます。

果たしてそうでしょうか。

間違った「配慮」

三菱総合研究所が2017（平成29）年8月に実施した調査によると、福島県産の食べ物をすすめられるか問うと、放射線が気になるのでためらうと答えるのは、家族・子どもに対して35％、友人・知人に対して33・1％に及びます。同じく、福島県への旅行をすすめられるか問うと、家族、子どもに36・9％、友人、知人に32・7％がためらうと答えています。3割を超える人が福島への忌避の感覚、もっと言えば「福島は汚れている。その土地で作られた食べ物は危険で、そこに生きる人は病気などになる可能性を抱えているに違いない」と「配慮」する空気を共有しているということです。3・11震災直後の数字ならば分かりますが、多くの調査・研究、現地の人々の懸命の努力の中で作物・人体・環境の安全性が確保されました。それでもその「配慮」は確実に固定化しているのです。それは多くの人の無知と恐怖と、「見て見ぬ振りをしよう、寝た子を起こすな」という沈黙の中で醸成されたものです。

『悪しき常識を変えるのに必要なのは、知ることを諦めない気持ちと、それを実践する場を作り続けることだ。』

この言葉を聞いた若い物理教師は、高校生が分かるように何十枚にも及ぶレジュメをつくり、自主的に放射線教育の授業を毎年行うようになりました。悔しい思いをした農家は全国をまわりながら福島の生産物と土地の魅力を語り続け、3・11がなかったら福島と接点を持ち得なかった範囲まで及ぶ多くのファンをつくり続けています。

なにか福島のものを買ってみる、旅行でも何でも良いから行ってみる。そういう日常の延長の中で遠くからでも知る瞬間に立ち会えるはずです。

Profile

1984（昭和59）年福島県生まれ。専攻は社会学。これまでに、復興庁東日本大震災生活復興プロジェクト委員、福島大学うつくしまふくしま未来支援センター特任研究員等を歴任。2016（平成28）年より現職。著書に『はじめての福島学』（イースト・プレス）『漂白される社会』（ダイヤモンド社）など多数。学術誌の他、新聞・雑誌等にルポ・評論・書評などを執筆。

きずな図書館

あの日からの或る日の絵とことば

編者／筒井 大介　発行所／株式会社 創元社

本書は、現代を代表する32人の絵本作家たちが、2011（平成23）年3月11日を振り返り、それぞれが思ったこと、感じたことを絵と文章で記しています。

題名の「あの日」とは、東日本大震災が起きた日。忘れられない出来事、忘れてはいけない日。

その日、32人の絵本作家たちは、それぞれの場所で、それぞれの時を、それぞれの思いで過ごしていました。この本には、あの日にまつわるごく個人的な出来事が詩のように、日記のように、また物語のように綴られています。

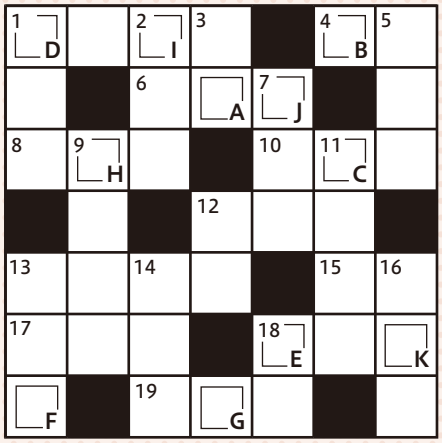
どの作品にも、「あの日から」を生きるすべての人へのメッセージが込められています。力強くそしてあたたかな絵と私たちに語る穏やかな言葉は、〝今を生きる〟ことを見つめ直すきっかけとなる一冊です。

ふれあいサロン

HUREAI SARON

投稿&クロスワードで「オリジナル3色ボールペン（タッチペン付き）」をプレゼント！

問 A～Kの文字を順番に並べると、何という言葉になるでしょう？



タテのカギ

1　無事かどうかということ。「○○○を確認する」
2　寒い日、池に張ります
3　それとなく物事を示し教えること。「○○に富む話」
5　「○○○を尽くして天命を待つ」
7　一生懸命励むこと。「○○○努力いたします」
9　隣近所に住む人。災害時、一番頼りになる存在です
11　環境に配慮した自動車の総称です
12　雨が多く降ること
13　もっぱら話を聞く側の人。反対語は“話し手”
14　ゆかり。因縁。「昔の○○○で…」
16　常温で飲める液体○○○は赤ちゃんのいる家庭では非常時用にストックしておきたいですね
18　太公望とは○○好きの人のことです

ヨコのカギ

1　いつまでも元気に歩けるように鍛えておきたいですね
4　これを投げてあきらめることは最後までしたくないですね
6　相手の反撃などを阻止すること。「○○○のピッチャー」
8　「山椒は小粒でも○○○とからい」
10　自分の家に帰る道。「○○○を急ぐ」
12　筒状の胴の片面または両面に革を張り、ばちをたたいて鳴らす楽器
13　非常時にも気持ちをしっかりと持っていること。「○○○○に振る舞う」
15　災難に遭遇したときには「○○も仏もあるものか」と思います
17　“してはいけない”と命ずること。「立ち入り○○○」
18　工具・道具。「○○○ボックス」「キッチン○○○」
19　○○○多い一年でありますように！

11月号の答え　ネットシャカイニイキル

読者からのお便り～11月号を読んで～

ネットによる人権侵害は、相手の顔が見えず、どんどんエスカレートするらしく恐ろしいと感じます。見えない相手への思いやりがもてるようになることを切望します。
（三木市 カナモンジャーVさん）

ネット社会と言われて久しいです。今やIoT、ビッグデータ、AIというさらに高次元の世界へ移行しようとしており、ネット社会とのつながりは絶ちようがない時代です。
正しい情報リテラシーを身につけるとともに、まずは個々の人権を最優先する姿勢が何より大切であり、それについて学び、そして話し合う必要があると思います。
（尼崎市 いつでも逸民さん）

ネットの知識は、大人・教師より子どもの方がはるかに進んでいます。
よく知り、お互いを守っていきたいです。
（たつの市 竜ちゃんさん）

「読者からのお便り」の投稿掲載者（令和２年３月号）とクロスワードの正解者（抽選で10名）とに、「オリジナル３色ボールペン（タッチペン付き）」をプレゼント。本誌「きずな」へのご意見やご感想、人々とのふれあいを通した心温まるエピソードなどを募集しています。どしどしご投稿、ご応募ください。

※投稿掲載時はペンネームの使用も可能です。
※当選者の発表は、賞品の発送をもって代えさせていただきます。

応募方法

はがき、ＦＡＸ、Ｅメールで受け付け。クロスワードの答え、郵便番号・住所、名前（ペンネームを使用の場合も要併記）、電話番号、年齢、職業、本誌へのご意見・ご感想を明記の上、ご応募ください。

締め切り

1月24日（金）締め切り（必着）

応募先

〒650-0003
神戸市中央区山本通4-22-15
県立のじぎく会館内
（公財）兵庫県人権啓発協会
「きずな」ふれあいサロン係
TEL 078（242）5355
FAX 078（242）5360
Eメール info@hyogo-jinken.or.jp

※応募者および投稿者の個人情報は、管理を適切に行い、誌面づくり以外の目的には利用いたしません。

情報ぷらざ
information

令和元年度人権啓発ビデオ
『サラーマット～あなたの言葉で～』が完成しました。

今回の作品のテーマは、「ＳＮＳ時代における外国人の人権」です。

訪日外国人の増加や、改正出入国管理法の施行など、外国の人々と接する機会が増え、職場や地域で共に生きる時代になっています。

また、スマートフォンの急速な普及によって、SNS内でのいじめなどが深刻化し、社会問題になっています。

この作品の主人公・珠美は、新しく職場に来たフィリピン人のミランダに対し、様々な「違い」を「壁」だと捉え、面倒な存在だと感じてしまいます。しかし、自分とは異なる文化や考え方を持つミランダとの対立や交流を通して、珠美は新たな視点に気づかされ、「違い」は様々な問題解決の糸口になることも学んでいきます。珠美とミランダの姿を通して外国人は「受け入れてあげる存在」でも「労働力」でもなく、助け合うことができる対等な仲間であること、SNSを傷つけるための道具としてではなく、人の心と心をつないでいくために利用する様子を描きます。

「違い」は壁ではなく、自分自身を成長させ、地域を豊かにする源です。異なる文化の人たちを、共に未来をつくる新しい存在として尊重し、互いに高め合っていく。そんな多文化共生社会の実現をめざす人権啓発ドラマです。

出演／真飛 聖、ＪＬ、金子 昇、草村 礼子ほか
企画／兵庫県、(公財)兵庫県人権啓発協会
企画協力／兵庫県教育委員会
製作／東映(株)
字幕副音声付/36分/活用ガイドはＤＶＤに収録

●貸出について
(公財)兵庫県人権啓発協会研修部　TEL 078(242)5355　FAX 078(242)5360

●購入について
東映(株)関西営業推進室　TEL 06(6345)9026　FAX 06(6345)6756

EVENT GUIDE イベントガイド

イベント名 加古川市人権学習初級講座『人権ひろば』

日時 1月18日(土)13:30～15:40

場所 加古川市人権文化センター 大ホール
※山陽電車「尾上の松」駅下車徒歩約16分 ※神姫バス「南備後」下車徒歩約5分

内容 演題:「パパは女子高生だった～自分らしく生きること～」
講師:前田 良さん(Like myself代表)
※事前申込不要 ※参加無料

問い合わせ 加古川市人権文化センター
TEL 079(451)5030　FAX 079(426)0062

※その他のイベント情報は、当協会ホームページ「研修会・イベント情報」をご覧ください。

ラジオ関西「谷五郎の笑って暮らそう」(毎週火曜日10:00～13:00)で、
12:35頃から「きずな」の記事等を紹介しています。

HALF TIME

ラグビーワールドカップの日本チームの活躍に熱狂した日本列島。しかし、同時期に関東地方や東北地方は豪雨災害に見舞われました。

そんな中で、ラグビーの試合前に黙とうをささげたり、カナダチームの選手が災害ボランティア活動を行うなど、同じ時を過ごす者として、それぞれの場所でできることをしようとする姿には胸が打たれました。

そんな時、今月号の図書紹介で取り上げた「あの日からの或る日の絵とことば」に出会いました。この本を読みながら、阪神・淡路大震災が起きた日のことを昨日のことのように思いだしました。阪神・淡路大震災から25年。“今生きていること”を見つめ直し、震災を「忘れない」「伝える」「活かす」「備える」ための活動を一人一人が考えていくことが大切だと思います。

本年も、人権にかかわるタイムリーな話題を取り上げ、読者の皆様とともに、人権文化あふれる社会づくりについて考えていきたいと思います。

本年もよろしくお願い申し上げます。　(西村)

「きずな」は、当協会ホームページからもご覧になれます。
兵庫県人権啓発協会　検索

(公財)兵庫県人権啓発協会　〒650-0003 神戸市中央区山本通4-22-15 県立のじぎく会館内
TEL 078(242)5355　FAX 078(242)5360　info@hyogo-jinken.or.jp

2020(令和2)年1月発行